

る。間谷西及び東地区でも遺物は認められるがその多くは流れ込みにより磨滅したものであることから、その中心は谷奥等にあるものと考えられる。

以上、発掘調査で判明した集落跡の様相について概観してみた。神西湖東岸地域は神門水海の縁辺部という地理的特性が活かされ、特に古墳時代では地域の核となる集落が出現していたと見ることができ、今後の調査・研究が進展して集落の実態等が解明されることに期待したい。

第2節 出雲平野における前期古墳の様相

インター線発掘調査で間谷東古墳と浅柄北古墳の2基の前期古墳が確認された。出雲平野において数少ない前期古墳の発見は古墳文化の受容と普及を考える上で貴重な資料であり、出雲平野の前期古墳の様相や浅柄北古墳の位置づけなどについて検討してみたい。

1. 出雲平野の前期古墳

出雲地方では安来平野や斐伊川中流域を中心に多くの前期古墳が築造されている。しかし、出雲平野に限定するとその数は少なく、前期初頭に西谷7号墳が築かれているものの、本格的な前期古墳としては斐伊川水系の北山周辺に位置する大寺1号墳と出雲平野南西部の山地古墳の2例が前期後葉になって出現することしか知られていなかった。ところが近年の発掘調査に伴い前期古墳の調査も増加し、3例の新資料が追加されることとなった。このように現在では5遺跡が知られることとなったが、それでも出雲東部に比べると少ないので現状である。

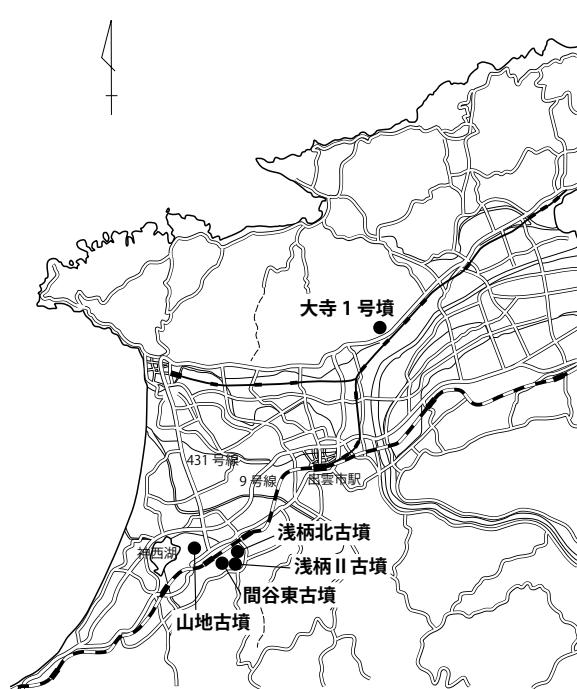
大寺1号墳は出雲平野北東の北山山系から南に延びる丘陵上の標高35m前後の尾根に立地している前期後葉の出雲地方において最も古い前方後円墳である。規模は全長約52m、後円部の径約27mと大きく、前方部、後円部とも二段に築成され、墳丘全面に葺石が施されている。竪穴式石室を有し、副葬品には鉄斧、鋤先などの鉄製品がある。

山地古墳は神西湖に隣接する東側丘陵の標高約28mの尾根上に立地する前期後葉の円墳である。不整形であるが径約24mの規模を測り、墳丘全面に葺石が施されている。埋葬施設は3基確認され、

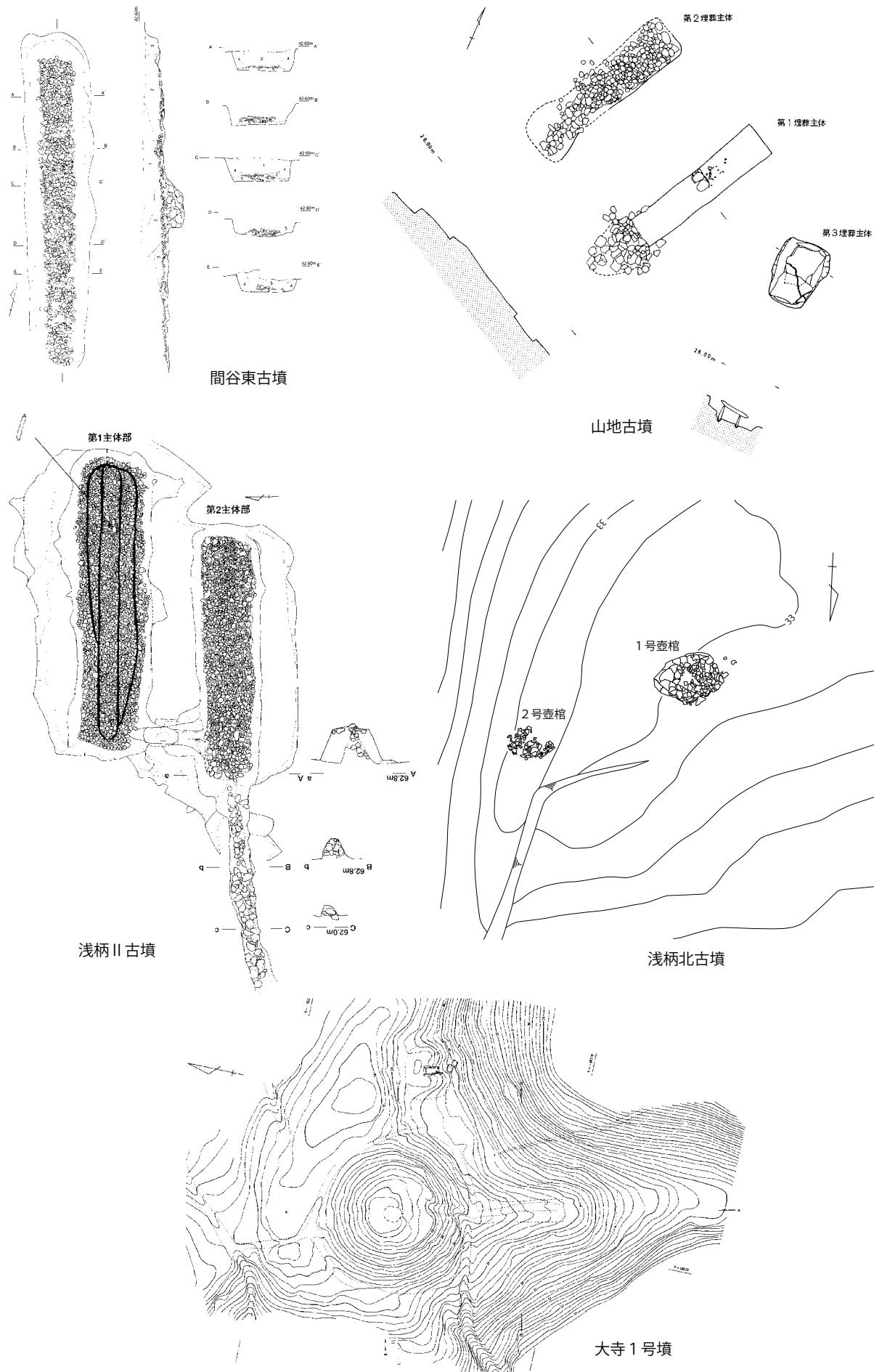
このうちの2基は礫床を有する木棺と箱式石棺である。これら主体部内から筒形銅器、二神二獣鏡、珠文鏡、碧玉製管玉等の豊富な副葬品が出土している。また、墳裾から壺棺も検出されている。

浅柄II古墳は浅柄北古墳の南方約300mの丘陵上の標高約63mの尾根上に立地している。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は礫床を備える粘土槨と礫槨の2基が並行して築かれている。粘土槨から小形の鉄劍1点が出土しており、この鉄劍と埋葬施設の状況から前期中葉～後葉に位置づけられている。

間谷東古墳は浅柄北古墳の500m西方の標高約42mの丘陵尾根上に立地する。墳丘の形態や規模については不明である。埋葬施設は「奥



第150図 出雲平野の前期古墳位置図



第151図 出雲平野の前期古墳

「才型木棺」と称される棺内礫敷組合式木棺が1基確認されている。棺内から刀子、棺上面から土師器甕片が出土しており、これらの特徴から前期末～中期初頭頃と考えられる。

浅柄北古墳については後述するが、以上のように大寺1号墳のみ出雲平野北東部に位置し、その他の4例は対岸の出雲平野南西部に位置している。また、大寺1号墳は前方後円墳という墳形を採用しているのに対して山地古墳は円墳と推定されているが他の3例ともに墳形が明瞭ではない。このことは単に地形や地質等の制約によるものかもしれないが、対照的な様相であり興味深い。

2. 浅柄北古墳の位置づけ

浅柄北古墳は出雲平野南西部の神西湖東岸の標高約33mの低丘陵上に立地し、北東に広がる出雲平野が一望できる眺望に優れた場所に築かれており、1号墳はこの丘陵の最高所に位置している。現状では狭小な尾根と急峻な斜面であり、自然地形を最大限に利用して築造されたとしても地形の制約から小規模な古墳であったと想像される。このような状況であるため墳丘の大半は流失したものと考えられ、墳形や規模等については明確にすることはできなかった。ただ、墳丘北側では墳裾と考えられるラインが認められており、これから推定すれば12m前後の規模が想定できる。

墳裾部分には石棺に使用されたと思われる板石が認められたため埋葬施設には石棺を備えているものと予想された。調査の結果、石棺やその痕跡はまったく認められず、検出できたのは土師器の土器棺2基だけである。1号土器棺は大形の壺形土器を縦割りにして2分割し、その2つを口縁部を真ん中にして被せるように墓壙内に設置されている。2号土器棺は土師器壺と甕の2個体で構成されているが、その組み合わせについては特定できず、墓壙の有無についても判断できなかった。墳丘出土の大形土器の性格については埋葬施設としての土器棺と供獻用土器の2種類に大別されており（松本1986年）、1号土器棺はその状況から土器棺であることはほぼ間違いないと考えられるが、2号土器棺については残存状況が悪く墓壙も確認できなかったことから考えれば、供獻用土器の可能性も否定できないであろう。

1号土器棺に使用された土師器は複合口縁の壺形土器で底部は平底を呈している。口縁外面に竹管文及び半裁竹管文、頸部～肩部にかけて5条の綾杉文を施し、体部内外面にはハケ目調整が施され、内面には部分的にヘラ削りが認められる。この土器の様相は松江市奥才古墳群13号墳出土の土師器壺や雲南市松本1号墳第3主体部出土の土師器壺に形態及び細部の手法が類似していることから、時期的に近いものと考えられる。奥才13号墳や松本1号墳は前期中葉に位置づけられることから、浅柄北古墳も同時期頃に位置づけられるものと判断した。

現在、出雲平野で最も古い古墳としては浅柄Ⅱ古墳が考えられており、浅柄北古墳はこれと同時期もしくは若干先行する可能性が高く、出雲平野の前期古墳の中で最も古い古墳に位置づけられる。中心主体が不明であるため、埋葬施設の形態について、特に礫床の有無などの問題には触れることができないが、出雲平野の古墳の出現と普及を考える上で極めて貴重な古墳といえる。

3. 神西湖東岸地域の特色

神西湖東岸では前述したように4例の前期古墳が集中している地域となった。浅柄北古墳を除く3例の古墳には埋葬施設に礫床を備えるという共通する特徴が認められる。礫床は出雲地方では古墳時代前期～中期前半を中心に比較的多く見られる埋葬形態であるが、出雲平野の前期古墳は5例と稀少であるにもかかわらず、その内の3例に礫床が採用されていることからみれば積極的に礫床を導入した地域とも見ることができる。山地古墳は3基の埋葬施設を備え、筒形銅器や青銅鏡など

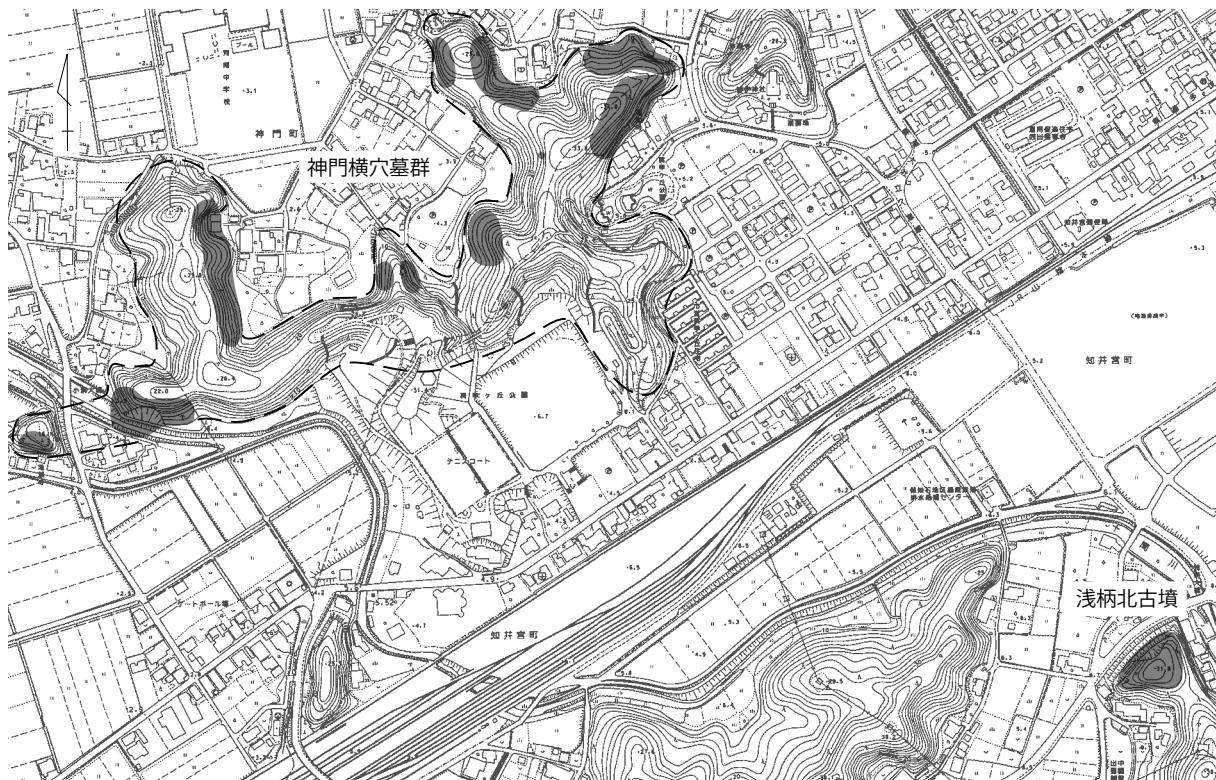
豊富な副葬品を有する古墳で、その立地から被葬者は内海航路を押さえていた首長と想定されている。浅柄Ⅱ古墳は粘土床の下に礫床を有する粘土槨を備えるという、県内では類例を見ない構造を呈するものである。間谷東古墳は木棺の底面に礫床を有する「奥才型木棺」を備えており、この木棺のタイプは北部九州から北近畿にかけて分布していることから、海上交通を中心とした広域な地域間交流が行われていたことが窺える貴重な資料である。

このように単に礫床を備えるだけでなく、粘土槨や「奥才型木棺」などの特異な埋葬施設を備える古墳の出現は神西湖東岸地域の特色といえる。神西湖が「神門水海」の名残であり、入海という当地域の地理的特性を活かした海上交通が出雲平野南西部の首長を中心に一定程度掌握されることにより様々な情報がもたらされ、その発展的過程において出現したものと理解したい。

また、中期になると御崎谷遺跡のすぐ南に位置する出雲平野全域を一望できる標高 100 m を超える丘陵上に出雲部最大級の前方後円墳である北光寺古墳が築かれている。この北光寺古墳に継続する大形の古墳は認められないが、周辺には浜井場 2 号墳や丁之内古墳など中期の小規模古墳が多く点在する地域もある。以上のように特異な古墳の出現は当該期に神西湖東岸の集落が大規模化することと密接に関連するものと考えられ、集落の変遷と併せて検討していく必要がある。

第3節 横穴墓の様相

出雲平野には多数の横穴墓が存在しており、その大半は神戸川左岸の神門横穴墓群、右岸の上塩治横穴墓群の 2 大横穴墓群等に集中している。出雲西部における横穴墓の出現は出雲 4 期の段階と考えられ、現状では出雲 3 期に遡る明瞭な横穴墓は確認されていない。このことから横穴墓の出現は松江市や安来市などの出雲東部より遅れると見られている。出現時期である出雲 4 期の横穴墓の特徴としては平面形態が縦長長方形で天井形態はアーチ形であることが指摘されており、出雲 5 期



第 152 図 神門横穴墓群と浅柄北古墳の位置 (S=1/5000)